Panasonic

2026年 調査結果

3割の企業で分散・連携遅延・属人化を課題視

データ活用・連携・分析に関する調査レポート

パナソニック デジタル株式会社

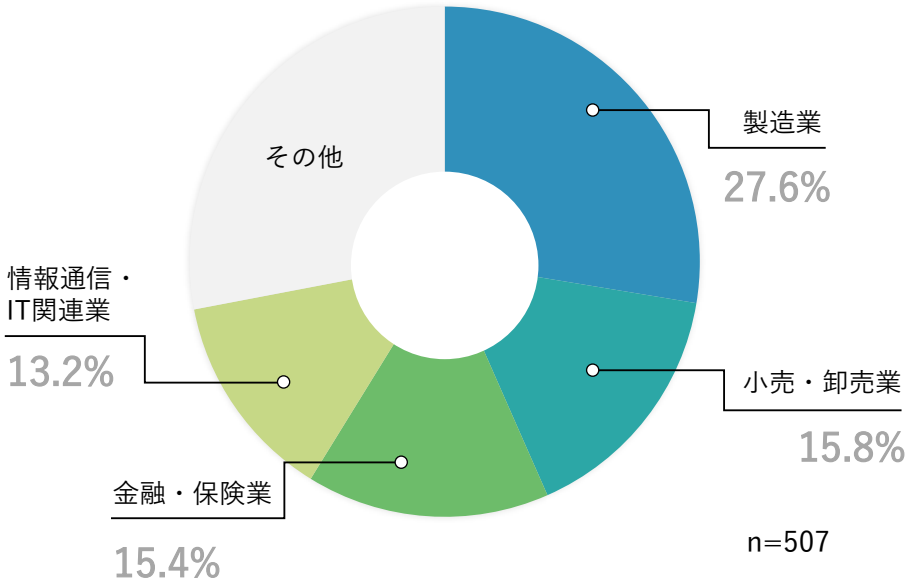
はじめに

企業経営において、今やデータ活用は不可欠であり、データは企業資産の一つとして重要視されています。
企業に集積されるあらゆるデータは、膨大な量となりすべてを効果的に活用するための「データ活用基盤」が、企業経営を左右する重要な課題となりつつあるのも現状です。
そこで本ホワイトペーパーでは、データ活用・連携・分析に関して、企業の現状や直面している課題について、アンケート結果を実施しました。設問ごとに有効回答者数を明記しています。（※弊社実施のインターネット調査：従業員数300名以上の企業に在籍する507 名を対象に2026年2月実施）

CONTENTS

はじめに ・・ P2
データ活用・分析に関する業務の現状 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P3
データ活用・分析に関する課題と不安 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P4
データ連携の利用状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P5
データ連携に対する満足度 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P6
データ連携・統合の導入・運用で外部支援を利用する場合のニーズ ・・・ P7
理想とするデータ活用やデータ連携のイメージ ・・・・・・・・・・・・・・・・ P8
データ活用を見据えたデータ連携ツールは「ASTERIA Warp」 ・・・・・・・・ P9
「ASTERIA Warp」導入のご相談はパナソニック デジタルへ ・・・・・・・・ P10

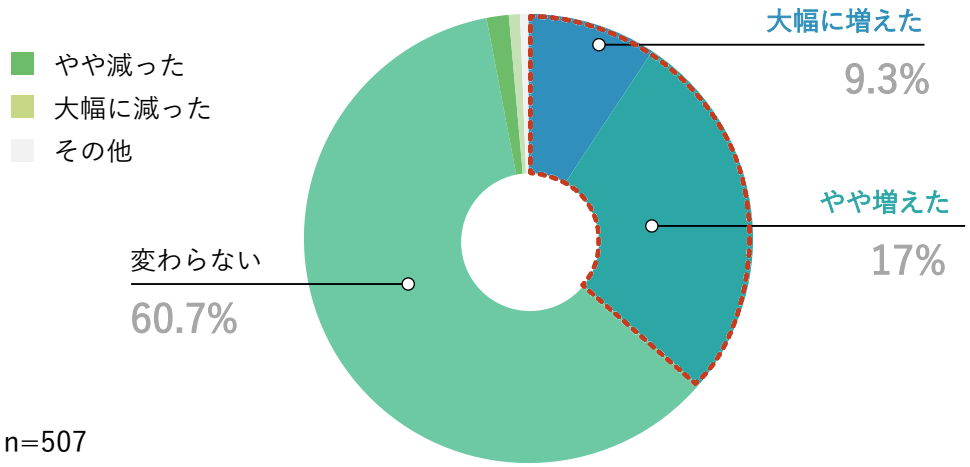
回答者の業界割合



© Panasonic Digital Co., Ltd.

データ活用・分析に関する業務の現状

Q1 データ活用・分析に関する業務割合の増加状況について教えてください

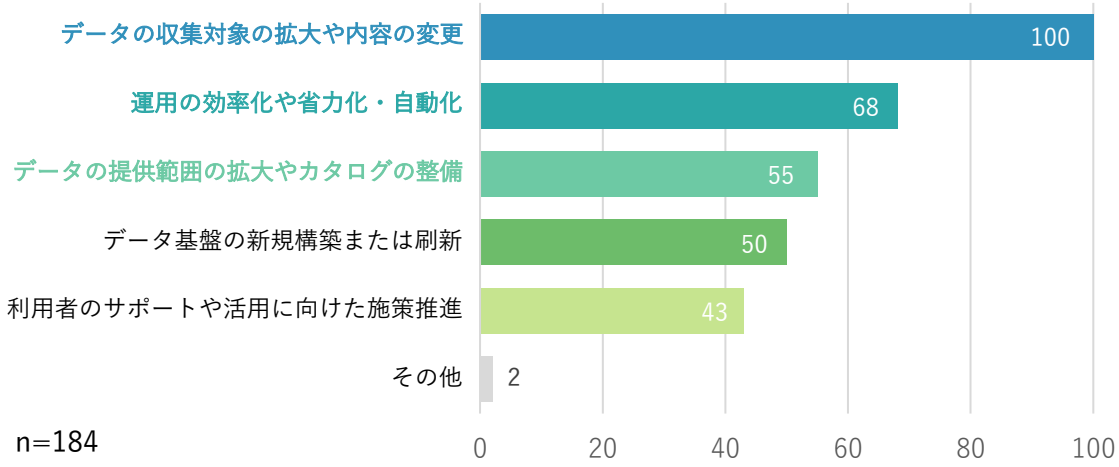


n=507

データ活用・分析に関する業務割合の増減は、「変わらない」が最多で60.7％でした。次いで、「やや増えた（27％）」「大幅に増えた（9.3％）」となっており、データ活用や分析業務の割合に変化がない人が多い反面、増加を実感している人も4割近くいることが分かります。多くの企業でデータ活用・分析に関する業務割合が増えており、データ活用・分析に必要なデータへのアクセス性、データの供給方法が問われつつある状況です。

Q2 増加したデータ活用・分析に関する業務の主な内容についてお聞かせください

複数回答可



n=184

Q1で「大幅に増えた」「やや増えた」と回答した人を対象に増加したデータ活用・分析に関する業務について伺ったところ、「データの収集対象の拡大や内容の変更」が最多の31.4％を占めました。次いで、「運用の効率化や省力化・自動化（21.4％）」「データ提供範囲の拡大やカタログの整備（17.3％）」となっており、データ収集対象の拡大・変更に対応する業務が増加していることがわかります。データの粒度変更・切り口追加など、一度作って終わりが前提の個別開発では、追従しにくい特性が明らかとなりました。

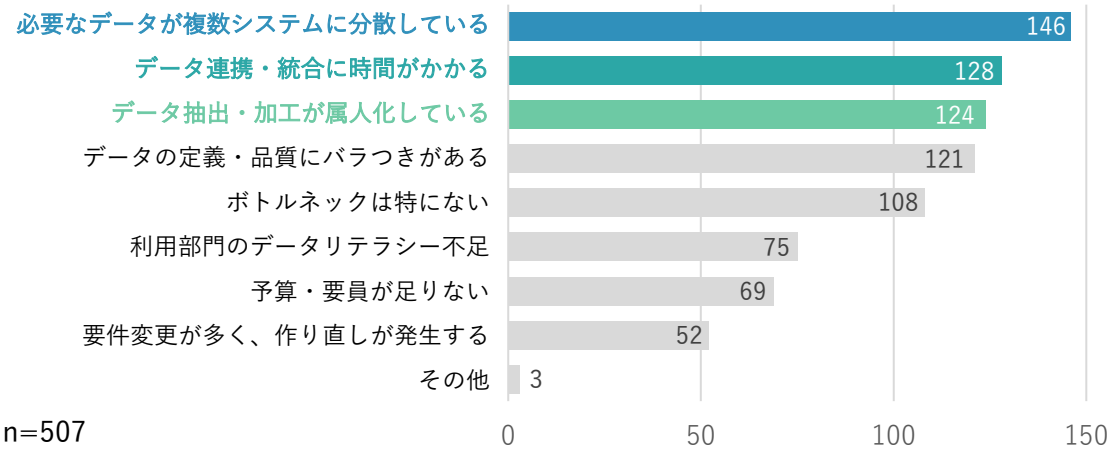
© Panasonic Digital Co., Ltd.

データ活用・分析に関する課題と不安

Panasonic

Q3 データ活用・分析の取り組みを進める上で、現在ボトルネックになっている点について

複数回答可

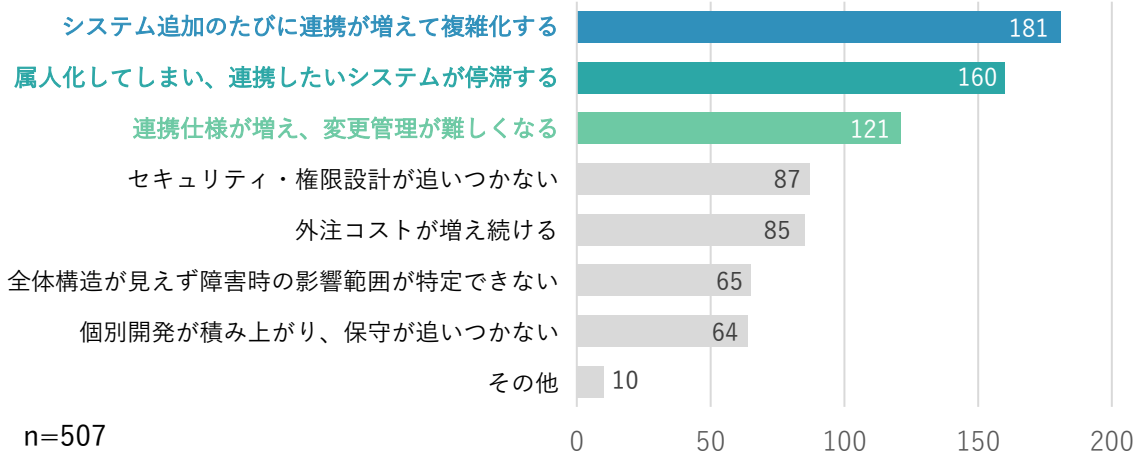


n=507

データ活用・分析に関する取り組みを進める上での最大の課題は、「必要なデータが複数システムに分散している」（28.8%）ことで、活用したいデータが一元管理されていない状況が多く見られます。次いで「データ連携・統合に時間がかかる（25.2%）」「データ抽出・加工が属人化している（24.5%）」との回答が続き、必要な時にすぐ使える状態にないことや、取得・加工プロセスが非効率である点も問題です。集めているデータを活用するために、多くの企業でデータ連携・統合の仕組みが不十分で、データ基盤整備が課題であることがわかります。

Q4 システムやデータソースが増えると想定したとき、データ連携・統合の観点で不安な点をお聞かせください

複数回答可



n=507

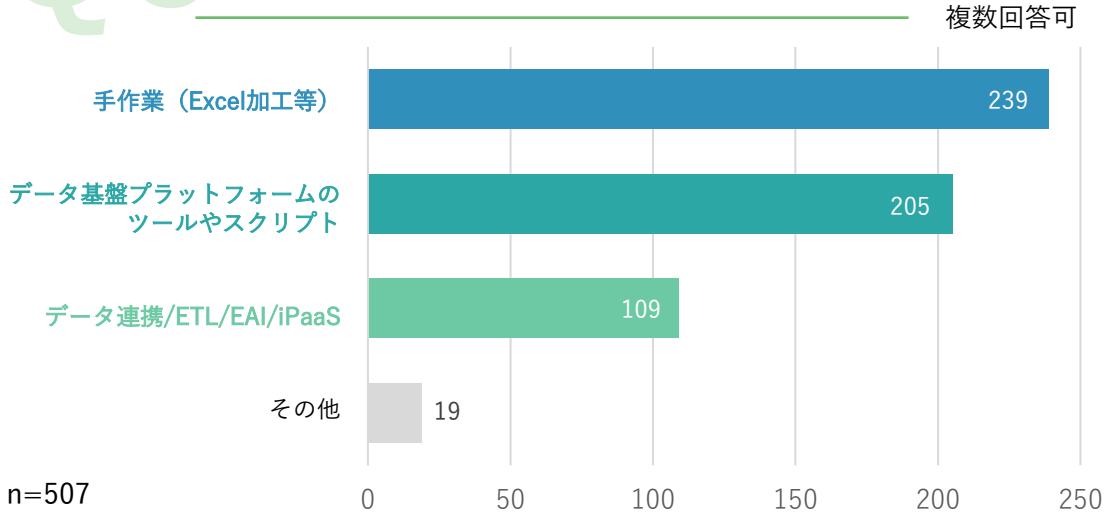
システムやデータソースが今後増える想定で、現行のデータ連携・統合手段のままの場合にどのような不安があるか、という問いでは「システム追加のたびに連携が増えて複雑化する」が最多の35.7%を占めました。「属人化してしまい、連携したいシステムが停滞する」も31.6%と3割を超え、場当たり的対応で手いっぱいな状況が見受けられます。将来不安の上位はシステムの複雑化・保守・変更であり、拡張性のある連携基盤による仕組み化が必要な状況です。都度開発からの転換が求められる状況にあると言えます。

© Panasonic Digital Co., Ltd.

データ連携の利用状況

Panasonic

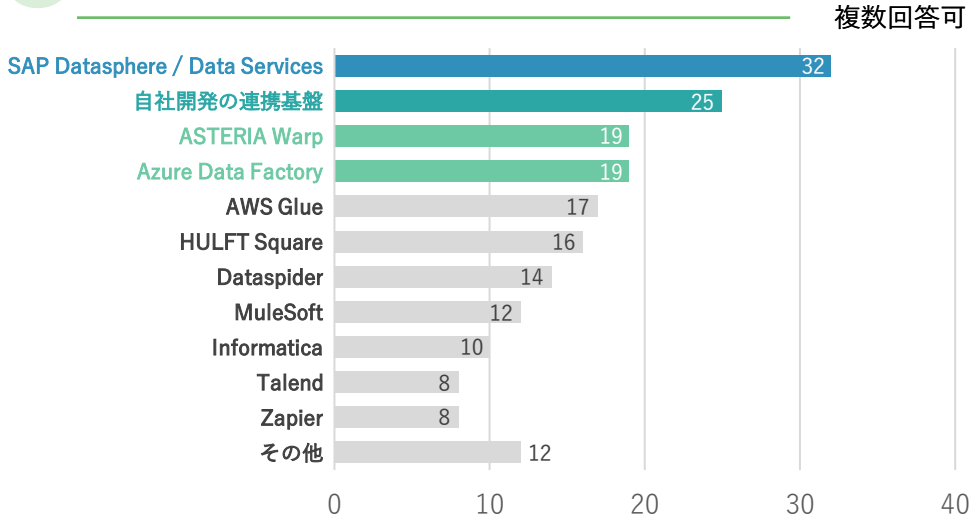
Q5 現在、データ連携に使用している方法を教えてください



n=507

現在のデータ連携に使用している方法は、「手作業（Excel加工等）」が最多で半数近い47.1％でした。担当者が都度データを抽出・加工するため、連携に時間がかかっているケースが多いことがうかがえます。次いで「データ基盤プラットフォームのツールやスクリプト（40.4％）」が続き、標準機能の利用に加え、要件ごとにスクリプトを作る個別開発に近い運用も含まれます。一方で、「データ連携／ETL／EAI／iPaaS」などの連携基盤を本格活用しているのは21.5％に留まり、回答の重複からはツールと手作業の併用も見受けられます。

Q6 現在どのようなデータ連携ツール、IPaaSを使っているかお聞かせください



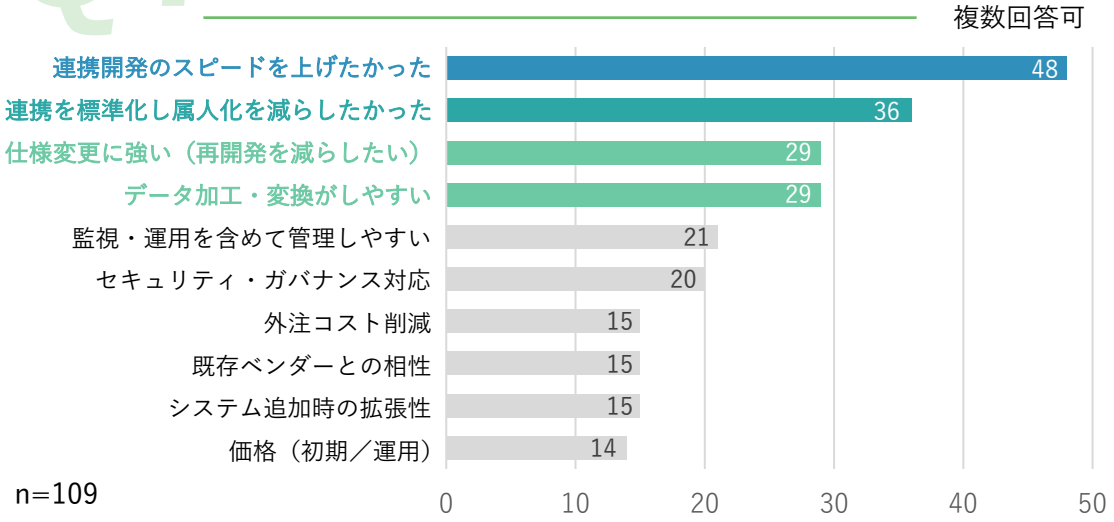
n=109

左記でデータ連携に使用している方法として「データ連携/ETL/EAI/iPaaS」と回答した人のうち、「SAP Datasphere/Data Services（16.7％）」が最も多く、次いで「自社開発の連携基盤（13.0％）」、当社製品「ASTERIA Warp（9.9％）」が続きました。国内では、外資系・日系といった企業文化の違いや、導入している業務システム、運用スタイルにばらつきがあるため、自社に合う連携ツールを試しながら導入するケースが一般的です。その結果、企業ごとに採用されるツールが異なり、複数製品が併存する状況となっています。

© Panasonic Digital Co., Ltd.

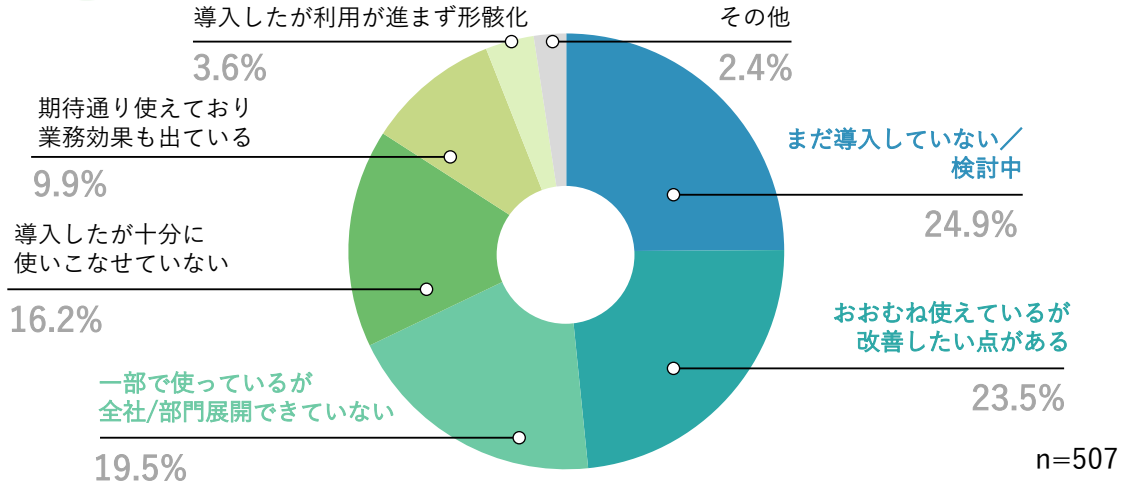
データ連携に対する満足度

Q7 現在利用しているデータ連携ツール/基盤を選定した主な理由を教えてください



データ連携/ETL/EAI/iPaaSを現在利用している人のうち、データ連携ツール/基盤を選定した理由に関しては、「連携開発のスピードを上げたかった」が19.8%で最多でした。次いで、「連携を標準化し、属人化を減らしたかった（14.9%）」「仕様変更に強い（再開発を減らしたい）（12.0%）」などデータ連携課題への対策を試みて選定していることが分かります。この結果から、連携開発スピードの向上に対するニーズの高さ、都度開発による対応頻度をいかに減らしていくか、という視点での連携基盤の構築が必要であると読み取れます。

Q8 現在の連携ツール／基盤の活用状況に最も近いものについてお聞かせください



現在のデータ連携ツール/基盤の活用状況に最も近いものに関する問いでは、「まだ導入していない/検討中」が24.9%と最多でした。僅差で、「おおむね使えているが、改善したい点がある（23.5%）」が次点となっています。一方で、「期待通り使えており、業務効果も出ている」との回答は9.9%と全体の1割程度に留まっている状況です。つまりおよそ9割の企業が、導入前段階、もしくは導入済でもなんらかの課題を抱えていることが分かります。このような導入後に発生する課題を解決するには、導入支援・運用設計段階で実務運用を見据えた連携基盤の構築が求められます。

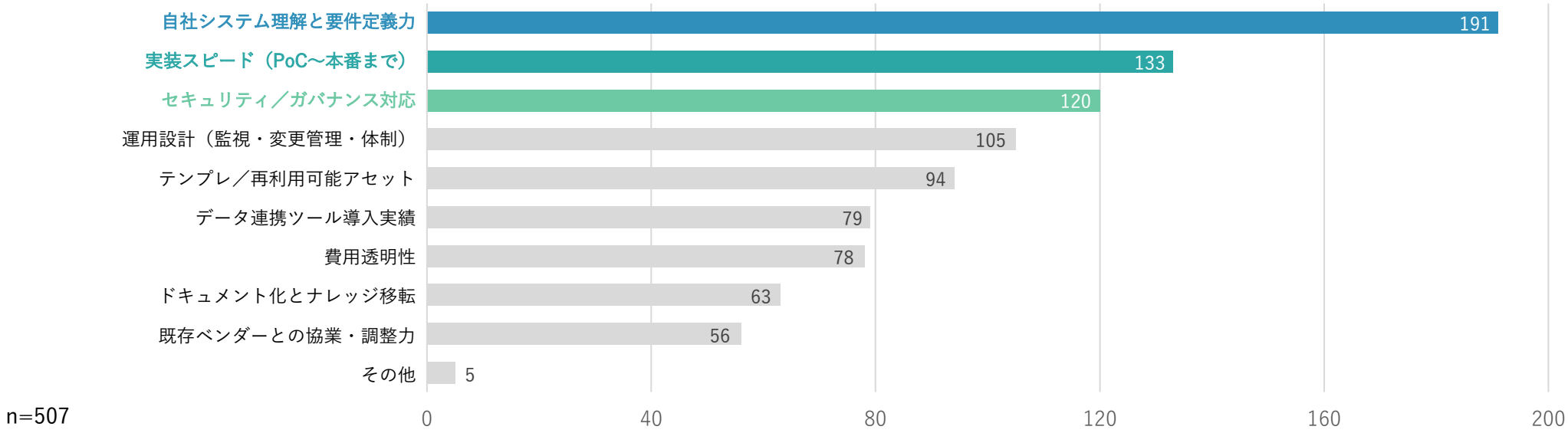
© Panasonic Digital Co., Ltd.

データ連携・統合の導入・運用で外部支援を利用する場合のニーズ

Panasonic

Q9 データ連携・統合の導入／運用で外部支援（SIer・ベンダー・コンサル等）を利用する場合に、重視する点についてお聞かせください

複数回答可



データ連携・統合の導入/運用で外部支援を利用する場合、「自社システム理解と要件定義力」を重視する回答が37.7%と最多でした。次いで、「実装スピード（PoC～本番までの推進力）（26.2%）」「セキュリティ/ガバナンス対応（23.7%）」となっており、実装スピードだけでなく自社要件への合致やセキュリティ面での対応を求める意見が多数を占めています。ツール単体でなく「運用まで伴走」への期待が高いことから、**データ連携・統合基盤の構築を「誰と取り組むか」が成功要因**になりつつあります。

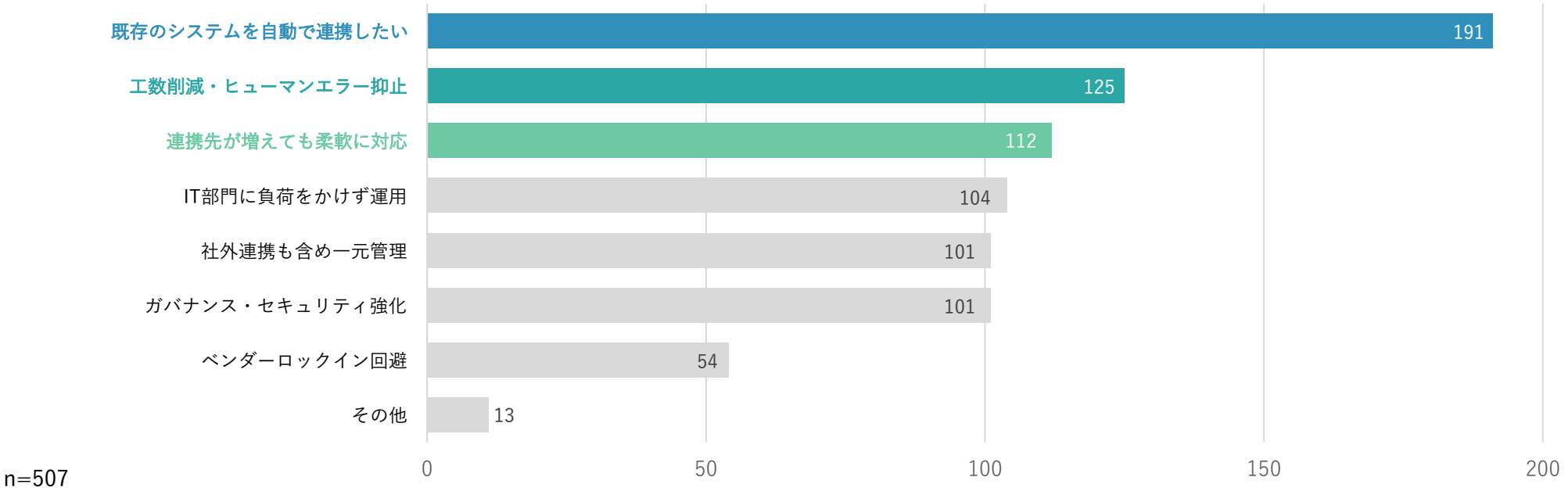
© Panasonic Digital Co., Ltd.

理想とするデータ活用やデータ連携のイメージ

Q10

データ活用やデータ連携において、今後どのような状態を理想とするかお聞かせください

複数回答可



n=507

理想とするデータ連携・統合の状態については、「既存のシステムを自動で連携できるようにしたい」が37.7%と最多でした。次いで、「工数削減やヒューマンエラーの抑止につなげたい（24.7%）」「連携先が増えても柔軟に対応したい（22.1%）」となっており、拡張性や業務効率化、ヒューマンエラーの抑止に対するニーズが高いことが分かります。データ活用ツールの導入で終わるのではなく、**将来のデータ連携先の増加・細分化を含めた拡張の余地を残す形でのデータ連携・統合基盤の構築**が求められている状況です。

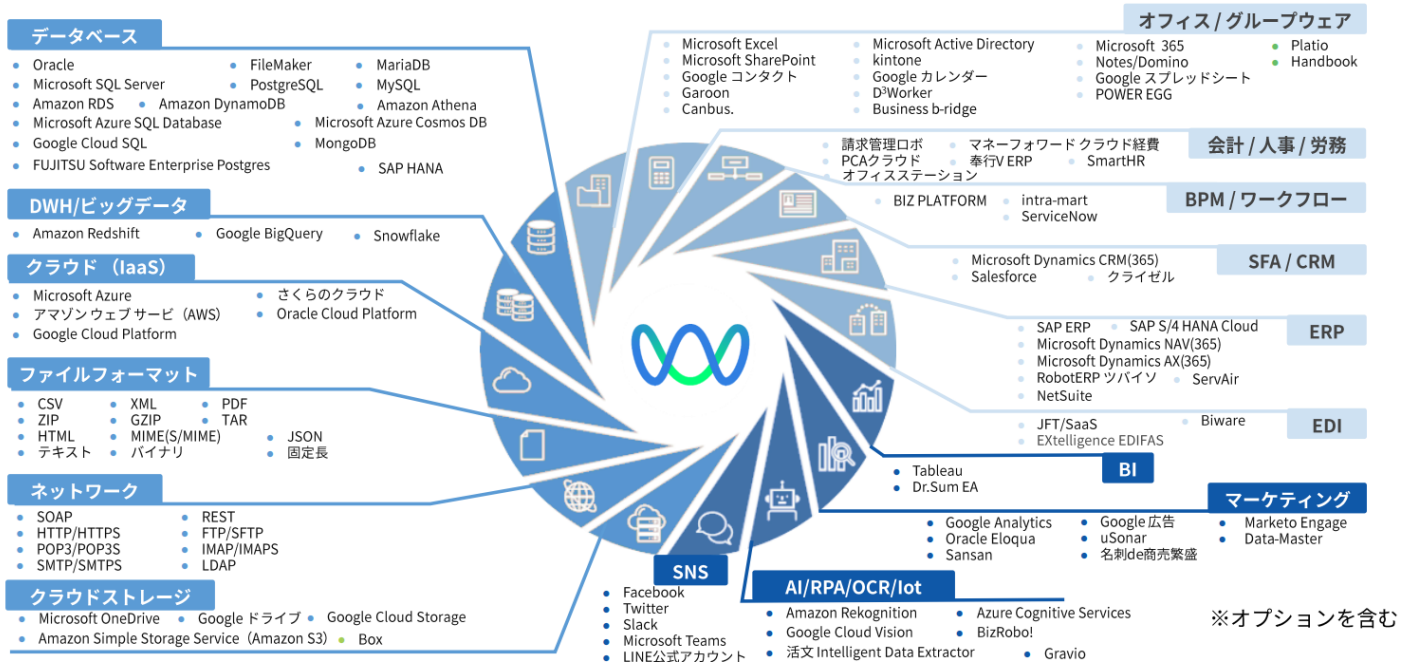
© Panasonic Digital Co., Ltd.

データ活用を見据えたデータ連携ツールは「ASTERIA Warp」

Panasonic

ASTERIA Warp（アステリアワープ）とは？

専門的な知識がなくても様々なシステムやサービスと連携し、ノーコード技術で業務の自動化・効率化を実践するデータ連携ツールです。



100種類を超える多くのインターフェース、データ、システム、サービスに対応しており、DB・ERP・CRMなどアプリケーション、クラウドサービス等連携機能が用意されています。

POINT 01 国内シェア19年No.1のノーコードデータ連携ツール

ノーコード技術で専門的な知識は不要なので、仕様変更や追加開発にも柔軟に対応。保守運用体制の変更にも容易に対応できます。

POINT 02 20年以上の経験、500社のデータ連携支援実績

パナソニック デジタル株式会社（以下、パナソニック デジタル）は、ASTERIA Warpマスター パートナーとして、多くの企業へ導入支援を行ない、ノウハウを蓄積しています。

POINT 03 内製化に向けたスキルトランスファー支援

長期の運用を視野に入れて、支援体制もご用意。ノーコードツールの特性と、パナソニック デジタルの長年にわたるノウハウが、貴社の成功をお手伝いします。

※「ASTERIA Warp」はアステリア株式会社の登録商標です。

システム間連携や、データ分析・マスターデータ管理を行う際のデータ統合、業務自動化など、さまざまなご相談に対応しております。

© Panasonic Digital Co., Ltd.

「ASTERIA Warp」導入のご相談はパナソニック デジタルへ

パナソニック デジタルでは、ASTERIA Warp（アステリアワープ）の導入支援も行っております。
20年以上導入支援実績を誇り、販売数No1となる年も多数。事例が豊富にございます。ASTERIA Warp（アステリアワープ）を利用する中でも、拡張性の高いデータ連携を実施すると評判です。とくにエンジニアの経験が豊富で、**80名以上いるASTERIA Warp（アステリアワープ）専任担当者が、全国どこでも貴社のデータ連携・統合基盤の構築・運用を支援**いたします。

こんな課題はありませんか？

データ活用ニーズの増加と個別対応の常態化

システム連携の個別開発に時間とコストがかかる

必要なデータ分析ができずユーザー部門の不満とデータ活用の停滞が発生

＼お気軽にご相談ください／

資料ダウンロードはこちら ＞

お問い合わせはこちら ＞

ご連絡先

パナソニック デジタル株式会社

大阪本社 TEL：06-6315-8634 住所：〒530-0053 大阪府大阪市北区末広町2番40号 Panasonic XC OSAKA

東京本社 TEL：03-5148-5578 住所：〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目21番1号 住友不動産汐留浜離宮ビル23階

Panasonic

© Panasonic Digital Co., Ltd.